



今回お話を伺ったのは… UN Women 日本事務所 所長

石川雅恵さん

SDGsの中でも大切な目標のひとつであるジェンダー平等。これからの世界と日本のジェンダー平等を実現していくために私たちにできることを、UN Women 日本事務所 所長の石川雅恵さんに編集長の羽生祥子が伺いました。



UN Women 日本事務所 所長
日本政府国連代表部 専門調査員を経て、国連本部及び地域・国事務所勤務。2017年より現職。米国サンフランシスコ在住。10歳の子どものママ。



日経xwoman総編集長 ecomom編集長
「日経DUAL」創刊編集長などを経て、「日経xwoman」を創刊。11歳、13歳の2児を共働きで子育て中。

石川雅恵さん いしかわ・かえ

羽生祥子 はぶ・さちこ

「コロナ後の社会でこそ ジェンダー平等に 真剣に向き合うべき」

ジェンダー平等を 社会のメインテーマに

羽生 石川さんが日本事務所の所長を務めている UN Women は、具体的にどんな機関なんですか。

石川 UN Women は女性と女の子の権利を守り、ジェンダー平等を達成するために世界中でさまざまな事業を行う国連機関です。女性の自立を支援する職業訓練や、レイプ被害者への対応を啓蒙するなど、さまざまな事業があります。広報活動や活動を継続するための資金集めも大事な仕事で、私は特に日本でジェンダー平等の実現を進めるための提言をしたり、支援の呼びかけなどを行ったりしています。

羽生 初めてお会いしたのは、G20に向けて前年の2018年に開催されたイベントでしたね。

石川 G20でジェンダーを盛り上げるために、まずは国会議員の方に理解を深めてもらおうと開いたイベントでした。このようなイベントを通じて、ジェンダー平等のために UN Women と一緒にぜひ何かやりまじょうと投げかけています。

羽生 スポンサーは企業などが多いのですか？

石川 UN Women の年間予算は約5億米ドル。一番のスポンサーは国家で、ほかには企業などです。拠出金が多いのはスウェーデンなどの北欧で、ジェンダー問題に力を入れている国が多いですね。

羽生 それはジェンダーギャップ(左ページ上)の順位にも表れていますね。日本はどうですか？

石川 アジアが一番お金を出しているのが日本です。ただ、日本に限らず、ジェンダー平等は、インフラなどと比べると、どうしても後回しにされがちです。そういう中で予算を集めるのは、なかなか大変ですね。

羽生 私もジェンダーというテーマが「サブ的なものであって、メインではない」という雰囲気を感じるような場面で感じることも多く、憤っています。

石川 今、世界がコロナで大変だから、ジェンダーどころじゃないという声もよく聞きます。でも、コロナの問題は、確実に世界中の女性たちに大きな影響を与えています。世界的不況で女性の経済的自立が難しくなったり、家庭内DVの増加がいろいろな国で報告されたりしています。

羽生 今、ジェンダーの問題に向き合わなくて、いつやるのかと感じますね。

石川 本当にそうです。一方でコロナ対策では、世界の女性リーダーたちがすばらしい指導力を発揮して、注目を集めました。女性の能力の高さが証明されましたね。

先進国の中で最下位 日本はジェンダー後進国

羽生 ジェンダーギャップ指数で

性ということですか？

ユ・エヌ・ウィメン UN Women

国連女性機関。ジェンダー平等と女性のエンパワメントのために2010年に設立。国連加盟国がジェンダー平等を達成し、国際的な基準を定めるための支援を行う。
<https://japan.unwomen.org/ja/>



日本国内や海外で活躍する石川さん。左上・東京証券取引所で開かれた「国際女性デー」のイベント。右上・出張で訪れたモンゴルのゴビ砂漠にて。下・西アフリカのシエラレオネ共和国の母子保健センターで。

先進国で最下位!

ジェンダーギャップ指数、日本は121位

世界各国の男女格差を経済、政治、教育、健康の4分野で示す「ジェンダーギャップ指数」。2019年の日本の順位は153カ国中121位で、前年の110位から大きく後退。特に政治(144位)や経済(115位)の分野で女性の参画が遅れています。

ジェンダーギャップ指数 ランキング

1(1)	アイスランド
2(2)	ノルウェー
3(4)	フィンランド
4(3)	スウェーデン
5(5)	ニカラグア
53(51)	米国
106(103)	中国
108(115)	韓国
121(110)	日本

※()内は2018年の順位/出典:「Global Gender Gap Report 2020」世界経済フォーラム(WEF)

家庭のジェンダー平等が 子どもの 人格形成に影響

石川 国民性に加えて、日本社会が人の失敗に厳しすぎるというのがある気がします。欧米では失敗しても次のチャンスがある。日本は一度失敗したら、許されない空気がありますが、もつと失敗に寛容でもないのではないかと、思いますね。

羽生 企業のCMでも、少しでもジェンダー問題に違和感を残すすぐに炎上します。1%でも叩かれる可能性があるなら、女性活躍なんて扱わないほうがいい、という風潮は確かにありますね。

バイアスをなくした アンステレオタイプを

羽生 今回UN Womenと我々日経グループでは、企業と組んで「アンステレオタイプ・アライアンス」というプロジェクトを始動

しました。

石川 「アンステレオタイプ・アライアンス」は、広告のアンコンシャス・バイアス（無意識なバイアス）をなくしていかうというものです。バイアスのかかった広告を撲滅するのがミッションです。目指しているのは、炎上広告を

探すようなネガティブチェックよりも、広告の持つパワーを上手く使ってジェンダー平等を広めることです。世界の企業に協力してもらい、バイアスのない社会を広告から発信しています。

羽生 例えばどんな広告ですか？

石川 個人的にいいなと思った広告に、日産自動車の中東で展開したCMがあります。最近ようやく法律で運転を認められた女性たちが初めて運転をするシーンを流したCMです。それまで彼女た

ちに運転を禁止していた夫や父親

が、緊張しながら運転する女性たちを励ますというもの。見ていて、すごく感動しました。

羽生 見てみたい！ アンステレオタイプが広がることで、日本の社会はどう変わっていくのかが気になりますね。

石川 私は米国で長く暮らしているせいもあって、日本は他人の目をすごく気にして付度し、マイノリティが意見を言いにくい社会に見えます。それが変わるには、ステレオタイプがなくなること、ダイバーシティが必要だと思えます。たとえ意見が違ってもそれぞれの考えを尊重して、そこから答えを見つける。社会がそういう寛容性を持ち、誰もが自由に発言できるようなといいですね。

家庭から男女平等を 当たり前と感じて育つ

羽生 もうひとつ、お伺いしたいのが子どもたちのことです。日本の子どもは、自己肯定感が低いといわれています。女の子はさらにジェンダーというハンディを抱えることになりました。そういう子どもたちのために、私たち大人は何

ができるでしょうか。

石川 子どもの自己肯定感が低いのは大人の責任。特に子どもに一番近い親の影響は大きいです。お母さんしか家事をしない家庭で育つと、大人になっても男女の役割とはそういうものだ、無意識に思ってしまうんですね。

そうではなくて、お父さんもお母さんも協力して、どちらも家事をする姿を意識的に見せてもらえたらなと思います。子どもの頃から、家庭の中でジェンダー平等が当たり前なら、その子が大人になったとき、自然にそういう行動ができるはずですよ。

羽生 家庭内のジェンダーは身近なだけに、改めて考えていきたい問題ですね。専業主婦が社会的に低い地位で見られがちなのも、家庭のジェンダー問題のひとつです。

石川 女性活用というと企業の管理職になることと思われがちですが、みんながそれを目指す必要はありません。あらゆる女性が自分が望む生き方ができるのを社会がサポートする。それが本来の女性活用だと思います。男性でも女性でも、生き方を「選択できる」ことが大事なのです。



世界中で女性たちをエンパワーメントする活動を支援するUN Women。世界的に有名な著名人たちが積極的に活動に参加して、ジェンダー平等を呼びかけている。

Copyright © UN Women
United Nations Entity for Gender Equality and the Empowerment of Women All rights reserved.

5 私たちに身近な ジェンダー問題

日本でも「女性だから」というだけの理由で、さまざまな差別があります。

- 家事・育児・介護などは女性の役割と考えられがち。しかも、それらが収入につながらないため経済的に自立しにくい。
- 男性に比べて会社での昇進のチャンスが少なく、昇進のスピードも遅い。
- 結婚・出産・育児というライフイベントと、キャリアが両立しにくい。
- 家庭でも「女の子だから」と、男子に比べて教育に投資してもらえない。

対談を終えて



「日本は炎上を恐れて、ジェンダーに関する課題を扱わない」という石川さんの指摘に、ドキッとしました。例えば組織の中でも、女性がジェンダー問題を声に出すと男性上司に煙たがられるからと控える、男性は言葉選びを間違えたら怖いのでタッチしないでおこうと黙る、こんな「無難」がまかり通ってきたかもしれません。私たちの世代のことなかれ主義が積み重なり、ジェンダーギャップ指数121位という結果を招いたのではないかと。次世代のためにも、この無責任な「無難メンタル」を打ち止めにしなければと感じました。

「ジェンダーギャップ会議」レポート

コロナ後の日本に求められる 「ジェンダー平等」と企業経営



日本経済新聞社・日経BPでは「日経ウーマンエンパワーメントプロジェクト(WEP)」をスタート。5月15日、キックオフとして「ジェンダーギャップ会議」をオンラインで中継しました。会議ではSDGsとジェンダー平等をテーマに、3つのプログラムを実施。ジェンダー平等が遅れている日本の課題とその解決策に加え、コロナ後の世界とジェ

ンダー、企業の経営戦略と多様性への取り組みなど、幅広い議題が取り上げられました。日経xwoman総編集長の羽生祥子をコーディネーターに、UN Women日本事務所 所長の石川雅恵さんも参加したパネルディスカッションでは、300通もの質問が寄せられるなど大盛況でした。イベントの内容は「日経WEPコンソーシアム」サイトで!



「ジェンダーギャップ会議」の記事はこちら▼

